

早稲田大学 本庄高等学院
2024 年度 入試問題の訂正内容

＜一般入試・帰国生入試＞

【国語】

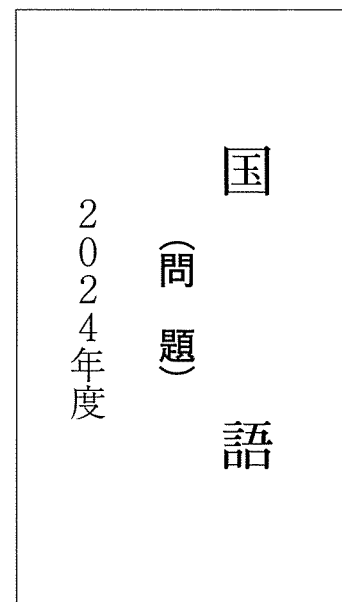
●問題冊子 4 ページ：(一) 問5

試験前に不備があることが判明したため、解答対象から
外しました。

以上

早稲田大学本庄高等学院
2024年度 一般・帰国生入試

注 意 事 項



〈R 06180062〉

1. 問題冊子および解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
 2. 問題は2～8ページに記載されている。問題冊子や解答用紙の印刷が不鮮明であったり、ページが抜けていたり、汚れていたりしている場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 3. 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 4. 受験番号および氏名は、試験が始まってから、解答用紙の所定欄（2か所）に正確に正しいに記入すること。
- 読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

5. 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示がでたら、ただちに筆記具を置くこと。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

十八世紀の西ヨーロッパに、「新しい novel Ⅱ小説」という名の、物語の形式が登場し、後に、それは、文学の代表的なジャンルとして全世界に普及し、定着した。それ以前の文学の形式、たとえば神話的なボウケン譚を含むロマンスのようなものから、小説を分かちつ特徴は、ある種のリアリズムである。このリアリズムは、次の二つの特徴からくる。第一に、小説は虚構ではあるが、その前提となっている時空間が、作者／読者が属する時空間と基本的に連続的・同質的であると感じられるように書かれている。第二に、登場人物の心理に一貫性・連続性があって、読者がその変化を納得しながら追跡することができる。このような小説がイギリスに登場したのは十八世紀前半、フランスに登場したのは十八世紀後半である。

¹ ネイション（国民）という意識と小説という文学形式とは、ほぼ同じ時期に成立した。このような並行性が見出されるのは、西ヨーロッパだけではない。世界中のどこでも、ネイションの成立とほぼ **A** を一にして、小説が文学の新シユコウ^②として登場し、やがて最も標準的な物語様式として定着した。そして、たとえば日本における夏目漱石のような、ネイションそのものを代表するような小説家が現われる。

ネイションと小説の間のこうした連動性は、偶然ではない。この現象には、はっきりとした社会学的な原因がある、とベネディクト・アンダーソンは主張している。ネイションと小説の間にどのようなつながりがあるというのか。重要なのは、小説の内容ではない。つまり、**B** 的な内容をもった小説が書かれたことがポイントなのではない。小説²という形式が必然的に要請する読みのスタイルが、ネイションを経験し、想像する様式と同型的なのである。

ことは、まさに小説の新しさ、小説なる文学形式が登場した際に人々が感じた新奇さにかかわっている。小説の新しさの源泉であり、そのリアリズムを可能にしている語法、ごく平凡な小説にも必ず見出すことができる語法、それは、——アンダーソンによれば——³「この間 meanwhile」という語を含む語りのスタイルである。小説は、「この間」という言葉を縦横無尽に駆使する。たとえば、主人公の男Aには妻Bと愛人Cがいて、その愛人Cには、主人公とは別に恋人Dがいたとしよう。小説には、次のように書かれる。「AはBと口論していた。この間、CはDとともに旅立とうとしていた」と。主人公Aは、自分が妻Bと口論しているとき、愛人CがDと旅に出ようとしていることを知らない。そもそも、彼は、自分の愛人Cの秘密の恋人Dが何者かを知らないし、会ったこともないし、小説の結末まで会うことがないかもしれない。にもかかわらず、二つの出来事、「AとBとの口論」と「CとDの旅立ち」が同一の時点に生じたということが語られるのだ。その同時性を示すための語が「この間」である。

小説以前の物語では、このようなかたちで「この間」という語が自在に用いられることはなかった。互いに接触していない二つの出来事、しかし物語の展開のなかで関連があることが判明するような二つの出来事、そうした出来事の同時性は、直接には示されない。⁴二つの出来事の間の同時性を示す典型的な方法は、小説的な文体が確立する前は、「会話によるフラッシュバック」であった。「フロランテがアテネで学習していたその同じ春に、アラディンはペルシアの王のキユウテイ^③にいた」ということは、フロランテとアラディンが実際に出会い、互いの過去を語り合ったときに、初

めて明らかになる。

こうしたこと、つまり小説において初めて「この間」を頻用する文体が確立したということが、ネイションやナショナリズムとどのように関係があるのだろうか。「この間」という言葉が、どのような世界、どのような時空間を前提にして使用されるのかを、まずは考えてみるとよい。「この間」は、小説の登場人物たちが、そして彼らが経験する多数の出来事が、同一の、質的に④ダンゼツのない空間に属していることを前提にしている。「AとBの口論」と「CとDの旅立ち」という二つの出来事が、互いに接触していないにもかかわらず、「この間」によって併置されるのは、これらの出来事が、同一の空間を同時に分有していると見なされているからである。

それでは、この均質な空間、さまざまな出来事が共通に所属している均質な空間は、誰に対して存在しているのか。この空間の同一性は、誰にとってのものなのか。この空間は、作品の読者（と作者）に対して存在しているのである。小説のそれぞれの登場人物は、AやBやCやDは、分散して生起しているローカルな出来事の内に組み込まれており、それらの出来事の間を関係を、つまりそれらが同一の空間の中に配分されているということ、直接には認識することができない。ただ読者（と作者）だけが、Aが喧嘩しているときに、Cが旅立とうとしているなどを、すべて同時に見るができるのである。読者（と作者）の視点が、このような特権をもつのは、それが、小説が描写している物語世界の中に、オノレの場所を持つていないからである。読者（と作者）は、登場人物たちとは違って、世界の外から出来事を眺めているのだ。要するに、読者の視点は、純粹に超越的な視点を、つまり神の視点を代行しているのである。

小説以前の物語が、「この間」という語を自在に駆使することができず、「会話によるフラッシュバック」に頼らざるをえなかったのは、語り手が、この神の視点に対応する超越的な視点をわがものにできていなかったからである。語り手の視点は、主要な登場人物と一体化して、物語世界に内属していたのだ。

ここまで議論を進めておけば、小説とネイションとの間の関係を説明することはたやすい。ネイションの本質的な特徴、それ以前の社会システムにはなかった特徴は、大半のメンバー同士が互いのことを知らず、一生会うことすらないのに、強い連帯感、命がけの同朋意識をもっている、という点にある。ある人を中心とした親密圏Iと別の人の親密圏Jは、互いに直接にはつながっていないが、同じ国民である限り、均質的で統一的な全体に所属していると（個々のメンバーに）想像される。IとJの関係は、まさに「この間」である。Iが何かをしている、この間に、Jは別の何かをしており、互いに直接交流しているわけではないが、彼らは同じ空間に属している同朋である。要するに、ネイションは、小説の読者にとつてのあの均質空間、物語の展開の場となっている均質空間と同じような現われ方をするのだ。別の言い方をすれば、ネイションは、小説の読者の視点と同じような、神の視点に類する超越的な視点を媒介にして、想像されるのである。私が自分を日本人の一員として把握するとき、一方では、もちろん、私の視点はネイションの内部に置かれているが、他方では、私は、外部の超越的な場所からネイションを把握してもいる。

小説とネイションが並行して登場する必然性は、以上の点にある。小説を読むという体験が必然的に要請する態度と、ネイションを想像し、体験するときに前提になっている態度とは、同じ構造をもっているのである。小説とネイションは同じ形式の視点を媒介にして成立しているのだ。

『ナショナリズムとグローバリズム』の大澤真幸の文章による)

問 1 傍線部 1「ネイション（国民）」という意識」の特徴を述べている六十字以内の箇所を本文中から探し、その始めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問 2 空欄 A に入るべき語を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 機 イ 帰 ウ 軌 エ 起

問 3 空欄 B に入るべき語句を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 学術 イ 国際 ウ 傾国 エ 愛国

問 4 傍線部 2「小説という形式が必然的に要請する読みのスタイルが、ネイションを経験し、想像する様式と同型的なのである」とはどういうことか。本文中の語句を用いて八十字以内で答えなさい。

問 5 傍線部 3「この間 meanwhile」という語を含む語りのスタイル」が成立するための前提を述べている五十一字の箇所を本文中から探し、その始めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問 6 傍線部 4「二つの出来事の間の同時性を示す典型的な方法は、小説的な文体が確立する前は、「会話によるフラッシュバック」であった」とあるが、「二つの出来事の間の同時性を示す典型的な方法」が「会話によるフラッシュバック」であった要因とは何か。最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 語り手の視点が、分散して生起するローカルな出来事にまで及んでいたこと。
イ 語り手の視点が、主要人物と一体化していて、物語世界に内属していたこと。
ウ 語り手の視点が、登場人物の心理の一貫性・連続性を捉えていなかったこと。
エ 語り手の視点が、読者と同一空間を同時に分有している点を見逃していたこと。

問 7 傍線部 ①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

(二) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

じゃぼじゃぼと冷や酒が注がれたコップを手元に引き寄せて、工業臭いにおいがつんと鼻孔の奥をうつつその安酒を少しずつ口に含んでいると、俺はいつたいこんなところで何をしているんだというすっかり軀に馴染んでしまったあの徒労感がまたゆるやかに戻ってくる。篝山も高島も黙りこくって酒を嚙っているのをいいことに、その、今はやや甘美なものと感じられるようになった徒労感を、かすかにしかし執拗に痛みつづける虫歯のうろを舌先で探るようにして、わたしはしばらくの間撫でさすり、慈しんでいた。と、いくらか気持が明るくなって、ひよっとしたらこの妙ききりんな仕事のオッファーこそ、ここ何年か待ち望みつづけて得られなかった、人生の転機のための絶好のきっかけなのかもしれないという幻想が薔薇色の霧のように心の中に広がり、思わずそれを半分ほどは信じてしまいそうになる。

咳払いを一つして篝山が喋り出す。「杉本が言つたかもしれないが、わたしは書家です」こういう汚らしい部屋に男三人が肩突き合わせて酒を飲んでいると何やらタコ部屋といった雰囲気が漂わなくても、そうした中で篝山がこんなふうに喋り出すのはいくらか滑稽に響かないでもなかった。「文字というのは不思議なものでね。要するに単なる約束事²でしょう。たとえば「鳥」なら「鳥」という字ね」右手に筆を持っているという思い入れで眼前の宙空に「鳥」という漢字をゆつくりと書いてみせる。さつき猫を撫でていた高島の指に似て、この老人も太くて長い指をしているが、何となく猥褻というかいやらしい感じがしてよく太った虫か何かが五匹別々に動いているかのように見えてしまうのはいったいなぜなのか。親指と人差し指と中指で持った想像上の筆で下の四つの点をゆるやかなリズムを刻むように打ってから、

「鳥。これは鳥の姿を象つて作られた字だと言われている。まあそんなだろう。しかしね、結局はただの取り決め、約束事でしよう。こういうのをあのカラスだのスズメだのシジュウカラだのを意味する記号だというふうに決めたわけです。そんなふうにしてわれわれの棲まう共同体というもの¹が成り立っている。ね、記号をめぐる共通の了解が必要なわけです。決まりに従って言葉と意味との透明な交換がどんどん行われていかなければ、人と人との意思疎通に齟齬をきたす。

「鳥」は「鳥」という意味だとね。これは単に形式的な約束なんで、それがわれわれみなの間で共有されていさえすればそれでいいわけです。トリという音があればいい。それから「馬」でも「兎」でもなく「鳥」なら「鳥」と判別できる文字さえあればいいんで、だとすれば文字³なんでものは味も素気もない明朝体の活字でもいいし、子供の殴り書きでもいいことになる。ここまでのところでは、書なんてものの出る幕はない。ところがですよ——」

「俺あやつぱり、酒は冷やが好きだわ」と、コップ酒をぐいっと飲み干した高島が唐突に言つて、ふうつと溜息をつく。

垢染みた身なりのうえに、胡座を組んでいるだしの足の裏が真っ黒に汚れており、厭でも目に入らざるをえないその黒さが、篝山の太い生白い指に劣らず何か猥褻な感じだった。高島は肩から二の腕にかけての筋肉の盛り上がりが凄くて、半袖のシャツがはちきれそうになっているのがこちらの神経のせいか見るからにうとましい印象を与える。いつたいこの男は、篝山老人が発散している威圧感をまったく感じていないということか、それとも篝山のみならずわたしの心の動きまでも

べて読み尽くしたうえで何か挑発のようなことをやっているのか。禿^{はげ}ちよろの卓袱台^{ちゃぶだい}に肘^③をつき、背中を丸めてコップ酒を飲んでいるかぎりはどこにでもいそうな人生に疲れたありきたりの老人にしか見えない籾山だが、ひとたび背筋を伸ばして宙の一点を凝視し、「たとえばこの字をね……」と言いながら空間を撫でてゆくにつれて何か動物的な精気のようなものが全身から濛々^{もうもろ}と立ちこめてくるようで圧倒されざるをえない。そうしたものをしかし、「親戚の者」だというこの男はまったく感じないのだろうか。

いきなり話の腰を折られて籾山はほんのかすかに顔を顰^{しむ}める体だったが、何やら無意味に口を開け閉めしながらそっぽを向いている高島の方には目をやりもせず、「ところがですよ——」ともう一度繰り返した。

「ところが、墨をたっぷりと含ませた筆をこうやって紙の上に走らせてゆく。形式的な約束事の上を墨というこの香ぐわしい物質でなぞってゆくわけです。と、何としたことか、その「鳥」という文字に不意に生気が宿り、うららかに囁^{ささ}り、翼を羽ばたかせて今にも飛び立ちそうになる。そういうことがたしかに起こるんですよ。もちろんしゅつちゅうというわけじゃない、何百回、何千回、いや何万回に一度というほど稀^{まれ}なことだが、人為的な約束事が前触れなしにいきなり壊れてしまう、そんな出来事が必ず起こるんだ」

「書道ってそういうものだとは知らなかったな」

⁴そぞじまたねおみ

「副島種臣の書を見たことがあるかね」

「いや」

「残念だね。」

A

。ああいうものを見れば、明治の日本というのがどれほどさまざまじい力が逆巻いていた時代だったのか、一目瞭然^{りょうぜん}なんだが」

「副島種臣っていうのは政治家の……」

「明治の政治家だが、むしろ書家と言った方がいい。近代日本の最大の書家だよ。いわゆる書家、書の専門家っていうのは今も昔もちまちました趣味人ばかりです。形骸化した美意識に閉じこもって

B

みたいなことにかまけている、ただ小器用なだけの連中だ。そこへ行くと副島の書はまったく違う。そこには、彼の人生がある。いやそればかりじゃない。そこには、明治という激動の時代そのものが露出している。江戸時代というのは日本がささやかな幸福とささやかな悲哀のうちにのどかに自足していた閑雅な時期でしょう。それがどんなものだったかは、これはたとえば与謝蕪村の書や絵を見ればいちばんよくわかります。その自足が黒船の到来で壊れるわけだ。

何とも呆気^{あっけ}なくね。日本は西洋文明によってむりやり押し開かれ、近代に直面することを強いられるわけです。そして、副島種臣の書にはその衝撃と暴力がまざまざと現われている。土俗と近代という二つの力が角突き合せているというのか——」

わたしは籾山^{まゐやま}種道の作品について図書館で読んだことを思い出したので、「雄勁^{ゆうけい}な建築性ですかね」と咬^かいてみた。籾山は虚を衝かれたようであつと目をぱちくりさせたが、すぐ上を向いてややわざとらしくハッハッと笑い、「そうか、わたしのことを何かで読んだんだね。あんたもなかなか油断のならない人だね、大概^{おおよそ}さん」

「読みましたよ、勲四等旭日章^{きよくじつしょう}ね。そういう人が山谷のドヤ街の真っ只中^{ただなか}でこうやって安酒を飲んでるっていうのが、僕にはよくわからないんだ」

「いいじゃないか。この部屋はなかなか落ち着くでしょう。それより土俗と近代ね。副島の書つ

ていうのは、実際その闘いなんですよ」と籙山は悠然としたもので、「あれは傑物だ。蒼海副島種臣。佐賀藩士の次男に生まれた人だね。日清修好条規の批准書を交換し到北京へ行って、清国皇帝に謁見したとき、ずっと立ったままで押し通した初めての外国人ということで名をあげた。跪礼、つまりこっちは這いつくばって皇帝に会っていただくのが当たり前の慣習だった時代ですよ。副島は立ってお辞儀をしただけで平然としていた。何せそういう男が書いた字だから、雄勁と言えど、勁そのものです。

C

がごとく奔放自在だね。虚仮威なんて嫌味を言う人もいるが、どうしてなかなかそんないい加減なものではない。どうか本物を一目見ていただきたいな。本に載っているような、小さく印刷された写真なんかじゃ書はわからない。本物を見て、その筆の勢いや墨の掠れ具合に籠められた、書き手の氣韻を感じてもらわなくては」

「氣韻ですか」

「氣韻としか言いようのないものがあるんだよ」

「ほう」

木で鼻を括ったようなわたしの「ほう」にむっとしたのか籙山がしばらく黙りこんだので、その機を捉えてわたしは、

「しかし、さっきの話ですけどね」と話題を戻すことにした。「いったいどうして僕なんです。ついでにこないだ、偶然みたいな成り行きでちよっとお目にかかっただけでしよう。どうやらあなたにとつてはとても重要なことらしいし、僕みたいなどこの馬の骨とも知れない者に……」

「いやいや、馬の骨とは思っておらない。失礼だが、わたしはあなたのことは少々存じ上げている。大学の頃作られたハミリ映画がありましたな」そして籙山が、わたしがいっぱしの詩人を氣取っていた大学生のときに自分ではせいぜい「美」を追求したつもりで撮った青臭い「芸術映画」の題名を挙げたので、わたしは喫驚してしまった。

「まさかあんなもの、見たわけじゃないでしょう」

「拝見しましたよ」と籙山は平然として言った。「なかなか面白かった」

そしらぬ顔をしたままでいようと努めたが、恥ずかしさで我知らず頬が熱くなってしまったのをこの老人が見逃したはずはあるまい。そもそも籙山が口にした題名自体、詩人氣取りが露骨に出たどうしようもなく氣恥ずかしい代物だった。あんなもの、面白いはずがあるものか。

「氣韻が籠もってましたかね」と、事態を茶化してしまおうとして言ってみたが、

「いや……」とわたしの言葉を真面目に受け取って東の間考えこんでみるふりをしてみせたのは、この老人の明らかな

I

だろう。あげくに、「あまり氣韻は感じられなかった」と

淡々と言ったが、悪戯っぽい光が一瞬瞳に閃いたようだった。

「ということは、才能がないってことでしょう」とつい挑むように応じてしまってからこれでは相手の思う壺だと後悔したが、後の祭りだった。

「いやいや、そんなことはない」と宥めるように言い、「まあ、今夜は飲みましょう。若い人と飲む機会があまりなくてね。……雨かな」

たしかにばらばらと雨粒が屋根に当たりはじめているようだった。

（松浦寿輝『巴』による）

問1 傍線部1「仕事のオフアー」とあるが、その「仕事」は何に関するものであると考えられるか。本文中から最も適切な二字の語句を抜き出して答えなさい。

問2 傍線部2「約束事」とは何か。それを述べている十一字の語句を本文中から抜き出して答えなさい。

問3 傍線部3「文字なんでものは味も素気そけもない明朝体の活字でもいいし、子供の殴り書きでもいいことになる。ここまでのところでは、書なんでももの出る幕はない」とあるが、「鳥」という文字を「書」として書く場合、「明朝体の活字」や「子供の殴り書き」とはどのような点が異なると述べているのか。本文中の語句を用いて四十字以内で答えなさい。

問4 傍線部4「副島種臣そえしまたねおみの書」の説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 副島は黒船の到来によって西洋文明にむりやり押し開かれた時代を生きており、その書には近代が土俗に上まわったことが表されている。

イ 書家とは形骸化した美意識に閉じこもった小器用な趣味人であるため、副島の奔放自在な書は書き手が政治家である点ばかりが評価されている。

ウ 副島の人生や人となりがそこにあるばかりか、近代に直面することを強いられた衝撃と暴力という、彼が生きた時代の激しさが露出している。

エ 副島の生きていた、ささやかな幸福と悲哀のうちに自足していた閑雅な時代を象徴するかのような、土俗的な雄勁ゆうけいさが特徴となっている。

問5 空欄 A 〃 C に入るべき表現を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 天馬空を翔かける

イ 百聞は一見に如かず

ウ 枯れ木も山のにぎわい

エ どんぐりの背比べ

問6 空欄 I に入るべき表現を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 軽侮と恥じらい イ 皮肉と悪意 ウ 同情と労い エ 敬意と譲歩

問7 傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

〔以下 余 白〕

国語解答用紙

<2024 R 06180062>

受 験 番 号	万	千	百	十	一
氏 名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

<2024 R 06180062>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

$$\left(\begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right)$$
 $(-)$ [illegible][illegible]
$$\left(\begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right)$$

(—)

[illegible]